

V 田原遺跡出土の縄文時代遺物について

四條畷市田原の東部山地にその源をもつ戎川は、下田原の丘陵の間をぬって天の川に合流している。花崗岩を基盤とする東部山地がなだらかになり、やがて下田原の耕地がひらける戎川左岸、標高144mの微高地に所在するのが田原遺跡である。

日本住宅公団の開発に先行して、昭和54年にこの地域の発掘調査が行われたのであるが、この遺跡からは縄文時代に属する土器、石器ならびに石組の遺構が検出された。調査では遺跡地の全面発掘が行われたのであったが、遺物の包含地域は南北43m、東西13mの範囲にわたっており、表土20cm床土10cmを掘下げ、更に黒褐色砂質土20cm～50cmをとり除いた後の赤褐色でや、粘土まじりの砂質土層30cm～60cmが包含層となっていた。

この地点は一段下の耕地が砂層入りまじりの層位であるのに比して、比較的安定した様子をうかがうことができ、戎川の氾濫においてもその影響を受けることが少なかったものと考えられる。近くに戎川の清流をひかえ東面にひらけるこの場所は、縄文時代に生きた人々の生活の場としての立地を十分に備えているものと思われる。しかも出土遺物からこの遺跡は、近畿でも数少ない早期に属するもので、北河内地方の早期縄文遺跡である神宮寺遺跡、穂谷遺跡、中期の星田旭遺跡と比較して、その立地の条件は非常に共通していると見ることができる。

包含層よりの出土遺物は、土器片、石器各種、礫器であり、中央部分には半円形になるであろうと推測できる約20cm立方大の多数の石を配置した石組の遺構が検出された。この石はすべて花崗岩であり、焼けた跡は見出せない。遺物の散布状況は、南側のや、おち込み状の部分に山形文の押型文土器(1)、と楕円文の押型文土器の破片がかたまっていった外は特業する出土状態ではなく、石組平面を基準に散布していた。

まず出土遺物のうち土器片についてであるが、器片は大きいもので5cm×6cm程度の大きさにとどまり、合計84個出土している。

山形押型文 3個 (第11図-1・図版20-1) 厚さ5mm 焼成は中程度

出土土器片中唯一の口縁部で、山と山との間は13mm、口縁には9mm毎に刻み目を入れている。その2は表面が磨耗し文様が明確に出ていながら、平行線に近いなだらかな山形のように思われる。焼成は弱く黄褐色、厚さ10mm。その3は山の文様がくずれているが、山と山との間が38mmで黄褐色、厚さ8mm。

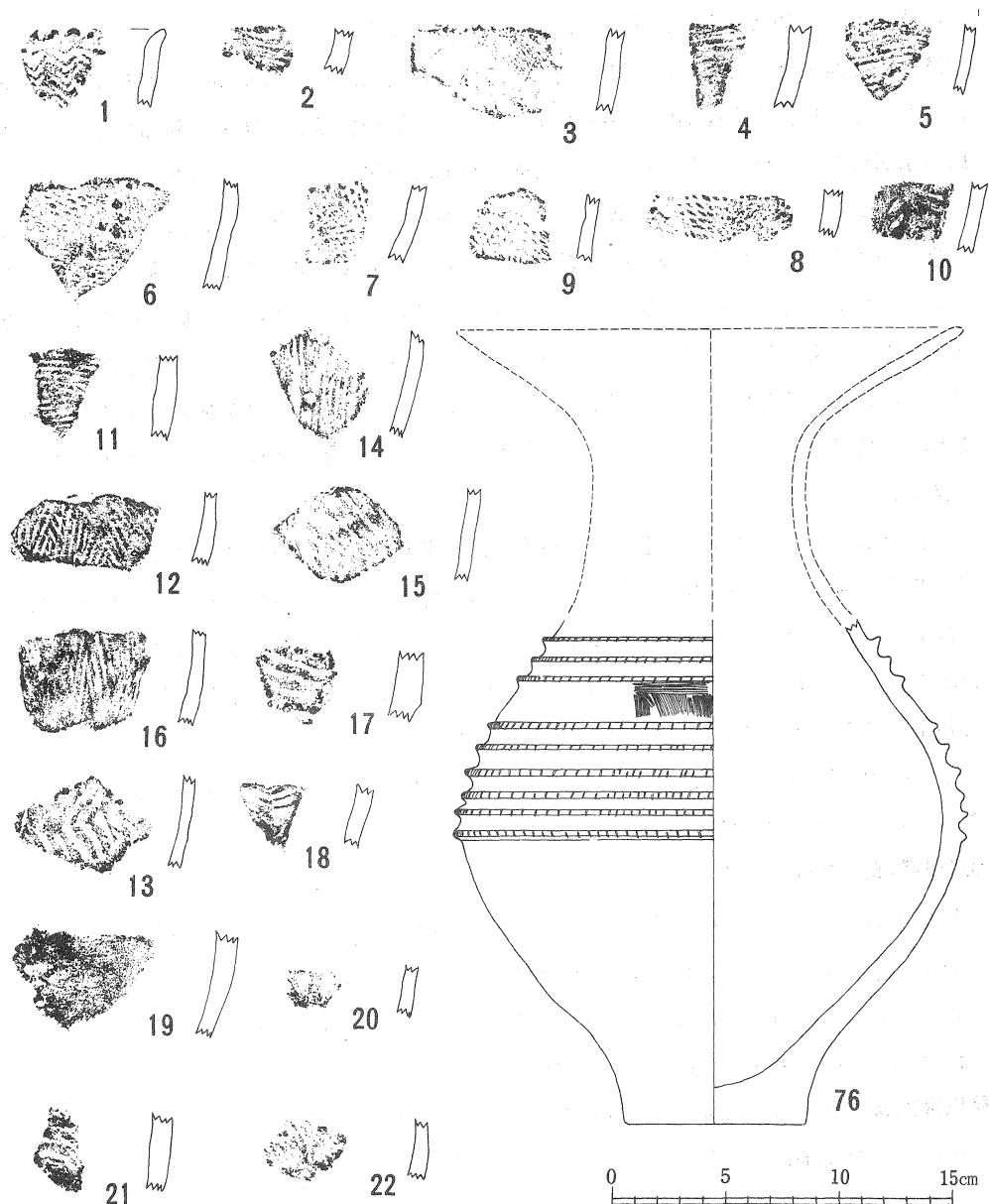
楕円押型文 6個 (第11図-6・図版20-6) 厚さ6mm 焼成は中程度

楕円の長径6mm、短径2～3mmの小粒の楕円押型を有する土器片で、いずれも胴部のものと思われる。黄褐色で土器の厚さに比して比較的大きな土器であったであろうと推測できる。小粒の楕円文は、一定方向でなく放縱に施文されており、器面全体につけられ

たのではなかろうかと思われる。

貝殻条痕文 19個 (第11図-5・図版20-5) 厚さ 5 mm 焼成中程度

比較的薄手の土器片で、胴部の破片が殆どで底部に近いもの 1 個。器面には貝殻による条痕が見られ、また内側にも条痕が見られる。底部に近い土器片には煤の附着が認められる。



第11図 出土土器実測図・拓影

過擦文 30個（図版 22） 厚さ 8mm 焼成弱

赤褐色で比較的厚手の土器で、焼成も弱く表面が磨耗しており文様を確認することはむつかしいが、二、三点同種の土器片で表面の保存の良いのを観察すると、貝殻等で擦って成型を行ったと思われる過擦痕がみられる。口縁部に近い土器片から、この土器は口縁に至って急に外反するように思われる。

その他（図版22-27）

残る土器片はごく小片であったり、磨耗がはげしかったりして、文様等の確認ができないものである。

土器と共に出土した石器は、大型搔器3、搔器19、石鏃2、石ヒ1、石錐1、剥片石器44、小型尖頭器1、ハンマーストーン1となっており、ハンマーストーン及び大型搔器1を除き他の石器はサヌカイトから作られている。搔器のうちで調整が良好と見られるものは7点で他は粗い調整である。剥片石器の中には、細石器の系列に入ると思われるものが17点程見受けられる。

田原遺跡の出土土器は一応、小粒の楕円文、山形文、貝殻条痕文、過擦文に分類することができたが、土器片には口縁部が1点、底部にや、近いもの2点で、これらから各文様をもつ土器の器形を導き出すことができないのが残念である。

田原遺跡に近いところでは、近畿で早期の一番古い時期に位置づけされている楕円の刺突文で代表する神宮寺式の土器をもつ神宮寺遺跡、また穗谷式の土器形式を与えられている穂谷遺跡があるが、これら遺跡との関連はどうであろうか。

遺跡の南部分のおち込み状から出土した山形文土器と楕円文土器は、土器の質、焼成の様子から同一のものであるとは考えられない。したがってこの山形文土器は口縁に刻み目をもち、その直下に山形を施文する土器、や、口縁で外反し多分尖底となっている土器を想像するのである。次に小粒の楕円文であるが、この文様をもつ土器は神宮寺・穂谷両遺跡からは出土していない。したがって北河内をふくめ大阪府では初出のものとなった土器である。戦前に大型の楕円文をもった土器が和歌山県田辺から出土し高山寺式と呼ばれるものであるが、その後兵庫県福本遺跡や滋賀県安土遺跡からも出ており、また山陰帝釈馬渡岩陰遺跡からも出土し標準化されている。東海地方でも小粒の楕円文の出土があり、これらは帝釈馬渡遺跡と同様比較的古い時期に当るとされている。したがってこの小粒の楕円文土器は、神宮寺につゞく縄文早期の前半に位置するものではないだろうか。

貝殻条痕文を器の内外に施文した土器は穂谷においても見られ、滋賀県石山貝塚の石山式との関連で対比されよう。ゆるやかな山形文は穂谷との関連とみてよく、過擦文の土器と共にこの貝殻条痕文の土器は楕円文の時期より下った早期後半に属するものと考えたい。

さて、こゝで一つ気になることは、出土石器中の小型尖頭器と剥片石器中の17点の細石

器と考えられる石器のことである。尖頭器は長さ35mm、幅12mm、たてはぎで刃部両側とも細かく調整を加えたものである。また剝片は15mm～30mmのもので、それぞれ二次加工を施した痕跡を残している。これらの石器はこの田原遺跡で早期前半の山形文十橢円文の時期に使用されたものか、或はそれ以前に細石器の使用がなされていたものなのか、今後の課題としたいことがらの一つでもある。